

第2表 モデルの代表的な10分間雨量分布.

上段：面積 (km²). 下段：半径 (km).

中心雨量 (mm)	雨量 k (mm)								中心雨量 の 1/2 に なる半径
	10	15	20	25	30	35	40	45	
50	880 16.7	512.5 12.9	297 9.7	160 7.1	84 5.2	40.5 3.6	15 2.2	3.5 1.1	7.1
45	770 15.7	447 11.9	247.5 8.9	128 6.4	63 4.5	27 2.9	7.5 1.5		7.5
40	660 14.5	372.5 10.9	198 7.9	96 5.5	42 3.7	13.5 2.1			7.9
35	550 13.2	298 9.7	148.5 6.9	64 4.5	21 2.6				8.2
30	440 11.8	223.5 8.4	99 5.6	32 3.2					8.4
25	330 10.2	149 6.9	49.5 4.0						8.5
20	220 8.4	74.5 4.9							8.4
15	110 5.9								—

がないわけではない。比較的重要と考えられる2つの課題をここに記す。まず第1に、10分間雨量の上限値を50 mmとしたことである。長崎豪雨の10分間雨量の極値は43 mmであったから、これより P_{\max} に対する関係は単なる外挿にすぎない。第1図からみて、この上限値はそれほど不自然ではなく、モデルとしては十分許容できると考えられるが、信頼性には幾分問題が残る。第2に、本モデルでは P_{\max} が大きくなると、それぞれの降雨面積も(2)式に従って増大する。しかし、特に $k=10\sim 15$ mmの面積が、 P_{\max} の大きい範囲(40~50 mm)においても、それまでと同じ傾きで増加を続けるかどうかには疑問が残る。ある限度から先の P_{\max} の大

きい値に対しては、面積が直線的な増加からはずれ、頭打ち傾向に推移することも考えられる。このような理由と、 $P_{\max} > 43$ mmの領域が外挿であることから、第4図の分布のすそ野にあたる、半径12 km以上でのモデルの信頼性はやや劣るものと考えられる。参考までに記せば、長崎豪雨で得られた $k=10$ および15 mmの降雨面積の最大値は、それぞれ、733 km² ($P_{\max}=43$ mmのとき)、584 km² ($P_{\max}=42$ mmのとき)であった。

文 献

荒生公雄, 1986: 10分間降水量でみた長崎豪雨の構造, 天気, 33, 17-26.

国際会議のお知らせ

会議の名称：気候と健康に関するシンポジウム
開催年月日：昭和61年9月22日~26日

主催団体：WMO/WHO/UNEP
場 所：レニングラード